

# 希望

小川未明

青空文庫



夏の晩方のことでした。一人の青年が、がけの上に腰を下ろして、海をながめていました。

日の光が、直射したときは、海は銀色にかがやいていたが、日が傾くにつれて、濃い青みをましてだんだん黄昏に近づくと、紫色におつてみえるのでありました。

海は、一つの大きな、不思議な美しい花輪であります。青年は、口笛を吹いて、刻々に変化してゆく、自然の惑わしい、美しい景色に見とれていました。

「昨夜も同じ夢を見た。はじめは白鳥が、小さな翼を金色にかがやかして、空を飛んでくるように思えた。それが私を迎え

にきた船だつたのだ。」

青年は、だれか知らぬが、海のかなたから自分を迎えにくるものがあるような気がしました。そして、それが、もう長い間の信仰でありました。この不自由な、醜い、矛盾と焦燥と欠乏と腹立たしさの、現実の生活から、解放される日は、そのときであるような気がしたのです。

「おれは、こんな形のない空想をいだいて、一生終わるのでないかしらん。いやそうでない。一度は、だれの身の上にもみるように、未知の幸福がやってくるのだ。人間の一生が、おとぎばなしなのだから。」

彼は、ロマンチックな恋を想像しました。また、あるときは、

おも 思わぬ知遇を得て、栄達する自分の姿を目に描きました。そして、毎日このがけの上の、黄昏の一時は、青年にとつてかぎりない幸福の時間だったのであります。

奇蹟が、あらわれるときは、かつて警告というようなものはなかつたでしょう。そして、それは、やはり、こうした、ふだんの日にあらわれたにちがいありません。

青年は、今日もまた空想にふけりながら、沖をながめていました。ふと、その口笛は止まって、瞳は水平線の一点に、びょうのように、打ちつけられたのです。いまでも、金色に縁どられた雲の間から、一そのの銀色の船が、星のように見えました。そして、その船には、常夏の花のような、赤い旗がひら

ひらとしていました。

「あの船だ！」

青年は、夢の中で見た船を思い出しました。とうとう、幻が現実となったのです。そして幸福が、刻々に、自分に向かって近づいてくるのでありました。

見ていると、銀色の小舟は、波打ちぎわにこいできました。入り陽が、赤い花卉に燃えついたように、旗の色がかがやいて、ちようど風がなかつたので、旗は、だらりと垂れていました。船の中で、合図をしているように思われました。彼は、かけをおりようかと思いましたが、ほんとうに、自分を迎えにくれたのなら、何人か、ここまでやってくるにちがいない。すべて、運

命いのちや奇蹟きせきというものは、そうなければならぬものだと考えかんがられたからであります。

それで、彼かれは、じつとして見守みまもっていました。船ふねから、人ひとがおりて、汀みぎわを歩いて、小ちいさな箱はこを波なみのとどかない砂すなの上うえにおろしました。そして、その人影ひとかげは、ふたたび船ふねにもどると音おともなく、船ふねはどこへともなく去さってしまつたのです。

青年せいねんは、赤あかい旗はたが、黄昏たそがれの海うみに、消きえるのを見送みおくっていました。まつたく見えなくなつてから、彼かれはがけからおりたのであります。砂すなの上うえに、ただ一つ、黙だまつて置おかれている、小ちいさな箱はこの方ほうに向むかつて歩あるきました。小ちいさな黒くろい箱はこは、すぐ近ちかくになりました。このとき、思おもいがけなく、白しろいひげをのばした老ろうじん人じんが、そ

ばから、青年せいねんに呼びかけたのです。

「若いわかの、あの箱はこを拾ひろう勇氣ゆうきがあるかの。」

おじいさんの言葉ことばは、なんとなく、意味いみありげでした。

この刹那せつな、青年せいねんの頭あたまのうちには、幸福こうふくと正反對せいはんたいの死しということがひらめいたのでした。

「おれは、まだ死しんではならない。もうすこしで、あぶないものをつかむところだった！」

彼かれは、せつかく、箱はこに近づちかいたかかとを、後方うしろに引き返かえしました。ふり向むくと、夕闇ゆうやみの中なかに、老人ろうじんの姿すがたは消きえて、黒くろい箱はこだけけが、いつまでも砂すなの上うえにじつとしていました。

夜中よなかに、目めをさますと、すさまじいあらしでした。海うみは、ゴウ



ゴウと鳴なっていました。青年せいねんは、待ちまちに待まった船ふねが、遠とくから持もつてきてくれた箱はこのことを思おもい出だしました。

「あの箱はこの中なかには、なにがはいっていらろう？」

夜よの明あけるのを待まちました。やがて、あらしの名残なごりをとめた、

鉛なまり色いろの朝あさとなりました。浜辺はまべにいつてみると、すでに箱はこは波なみ

にさらわれたか、なんの跡形あとかたも残のこっていません。

その後のち青年せいねんは、この話はなしを人ひとにしました。

「君きみは、夢ゆめを見みたのだ。」と、だれも信しんじてくれませんでした。

そのうちに、彼かれの青せい春しゅんも去さってしまつたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「希望《きぼう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 希望

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>